

## 古代鍼灸流派

中国の鍼灸医学は悠久の歴史的発展をへて、実践から理論へ、理論から実践へを繰り返して、深く広く研究を行い、目ざましい進歩を遂げてきた。古代の学者達は鍼灸の未知の世界を探索する際に、さまざまなテーマや研究方法、角度からそれぞれの思想や理論を提起し、数多くの学説と流派を形成した。こうしたことは、鍼灸医学を豊富にし発展させるうえで、大きな推進力となった。

学説と学派の関係は非常に密接である。だが、この学派と流派の概念は全く同じというわけではない。学説は学派を構成する要素であり、学派を形成する基礎となるものである。したがって、学派には必ず学説があり、学説のない学派は存在しない。しかし、本論でいう流派は概念の範囲がもっと広く、学説をもった学派だけでなく、ある問題に対する主張や見解、解釈、傾向が必ずしも系統的な学説をもたないものも含まれている。たとえば、葛洪かっこうの流派は灸による急性症の治療を重んじたが、彼の著作にその思想を反映した系統だった理論を見出すことは難しい。また、何若愚かじくぐは子午流注納甲法を唱えたが、時間にもとづいて取穴する流派の理論としては、やはり包括性に欠けている。

古代の鍼灸学者は自分がどこの流派に属していると宣言することはほとんどない。したがって、本書では文献にもとづいたうえで、その思想の特徴によって人為的に分類を行った。いわゆる「鍼派」とは広く

鍼灸の流派を指すのであって、けっして鍼法の流派のみを指しているのではない。「四庫全書総目提要」明堂灸経に「古法は鍼灸と併称することが多いが、ただ鍼とだけいって灸を含めていることもある」とある。このように、いわゆる「鍼派」とは鍼灸の流派を総称した言葉である。

### 一、鍼灸流派の起源

鍼灸療法ははるか昔の原始社会に芽生えたもので、我々の祖先が遠く石器時代（紀元前約二十一世紀）にはすでに石製の原始的な鍼と艾によって体表の一定の部位を刺激して治療を広く行っていたことは、考古学上の発見や現存する最古の文献などによつてうかがえる。社会が進歩し、生産も発展し、経験も蓄積されるにつれて、これらの療法はたえず向上した。とくに殷の盤庚ばんこう（紀元前十四世紀）以後になり、文字が大量に生み出され増加する時代に入ると、鍼灸療法が医学という一つの学問として生まれる条件が整うこととなった。「帛書」経脈篇（『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経』）が出土したことで明らかになったように、遠く春秋戦国時代にはすでに文字によつて鍼灸が記されていたのである。この後、系統だった医学専門書である『内経』が現れ、大量の鍼灸学理論が記されるようになったことは、鍼灸がすでに一つの学問に発達したことを意味している。

戦国時代（紀元前四八一年～二二一年）になると、学术界に諸子が輩出し、百家争鳴の状況になったが、このことは空前の文化的繁栄を示している。範文瀾はんぶんらんは『中国通史簡編』第一編第四章「古代文化の創造」で、この時すでに「法家学派」があったこと、また鄭国ていこくは「子産こそ法家学派の創始者である」と指摘している。また、同書第五章の「戦国文化の一般状況」では、この時期には「儒家、墨家、道家の三大学派」があったと説明しているが、医学学派については言及していない。しかし、文献学的には鍼灸学派も存在

していたといえる。近代の謝利恒は『中国医学源流論』医学変遷で「中国医学の起源は非常に古い。『礼記』曲礼に、医、三世ならざればその業を服せず、とあり、孔穎達の疏は旧説を引用して、三世とは『黄帝鍼灸』『神農本草』『素女脈訣』（別名を『天子脈訣』）の三書である、と述べている。これがおそらく中国医学最古の学派であろう。これらの書は後世に伝わるのだが、『靈枢経』は『黄帝鍼灸』の一派、『本経』は『神農本草』の一派、『難経』は『素女脈経』の一派である。これら三書が書かれたのは、おそらく周と秦との境あたりであろう。……』と述べている。

中国最古の医学流派の一つと目されているのは「黄帝鍼灸」である。黄帝とはこの流派の代表人物の一人であるが、『内経』と晋代の皇甫謐の書である『帝王世紀』『鍼灸甲乙経』および宋代の羅泌の『路史』などによると、この学派の創始者であり広めたのは当時の名医であった岐伯である。『内経』の経文はほとんどが黄帝と岐伯との問答形式であるが、岐伯が黄帝の師であること、岐伯がこの派の中心人物であることが、『甲乙経』序に「黄帝は岐伯、伯高、少俞などの人物を訪ねては意見を求め……、こうして鍼道が誕生したのだ」と書かれていることからわかる。さらに、『路史』などの記述から、この派にはほかに俞附、雷公、少師、巫彭、桐君など一群の学者がいたことがわかる。このなかには当然、岐伯の師である僦季貸も含まれる。『内経』以外にも、『隋書』経籍志中の『岐伯経』、『旧唐書』中の『黄帝明堂経』『黄帝鍼灸経』、『新唐書』中の『岐伯灸経』、『宋史』芸文志中の『岐伯鍼経』などもこの流派の思想を述べた専門書であると考えてよい。この外、『宋史』芸文志に春秋戦国時代の書といわれる『伯楽鍼経』や劉向の『列仙伝』、偽蜀の『馬鑑続事始』、徐春甫の『古今医統』などに、黄帝の時代に馬の鍼灸治療の名手であった馬師皇を称賛する記述が見える。『列仙伝』師皇篇によると、師皇は馬の獣医で「馬の唇の下や口中に鍼を刺し、甘草湯を飲ませて病気を治した」という。このことから、当時すでに獣医鍼灸流派が存在していたことがわかる。『左伝』に登場する医爰、医和はどうかというと、彼らは別の一派の指導者であ



黄帝像（山東省済寧県武氏祠に保存されている紀元後2世紀漢時代の石刻）

ると考えられる。いずれにしても、黄帝岐伯鍼派は比較的大きな一つの流派にすぎなかったのである。黄帝岐伯鍼派が及ぼした影響は非常に大きく、また多くの後世の医家が『内経』を経典として尊んだために、この一派の学術思想は中国の鍼灸医学の正統となった。

黄帝岐伯鍼派の後、戦国時代には著名な「扁鵲鍼派」が現れた。司馬遷の『史記』扁鵲倉公列伝は、扁鵲が鍼灸に精通し、屍厥（人事不省）になった魏太子を鍼灸で治癒させたために有名になったと書いている。彼の師は長桑君で、その門下生には子陽、子豹、子明などがいる。扁鵲は著作を残さなかったが、魏太子の子陽の思想が特異であったということがわかる。扁鵲が現在の河北省任丘の人であることから、河北省も鍼灸発祥の地の一つであること、またそこに別の流派が形成されていたことがわかる。

以上からわかるように、古代の鍼灸流派にまつわる伝説は非常に多い。流派の形成は鍼灸学の形成に歩調を合わせるようにして春秋戦国時代に始まる。そしてこれら流派の思想が後世の各流派の発展させる基礎となったのである。